

令和 4 年度自己評価表

鳥取県立八頭高等学校

【中長期目標(学校ビジョン)】

- 1 主体的に学び、自分の言葉で表現できる生徒を育成する。
- 2 チームで取り組む経験を通し、互いの多様性を知るとともに自己有用感を高める。
- 3 地域連携の主体となり、地域に根ざした学校としての役割を果たす。

【今年度の重点目標】

- 1 授業に集中

① 高校生活や授業におけるマナーの徹底。

② 全教科で公開授業や研究授業を実施するとともに、積極的に A L や I C T に係る研修に取り組み、生徒の主体的な学びを支援する。

③ 一人一台端末の効果的な活用と、新学習指導要領、特に観点別評価の導入について円滑に対応する。
- 2 行事で団結・部活は熱中

① 本校独自の活動を通して八頭高生としてのアイデンティティーを育むとともに、地域から信頼される学校作りを行う。

② 生徒の悩みに的確に対処し、心身の健全な発達を促すとともに、学習との両立を意識した計画的・効率的な部活動運営を行う。
- 3 進路に挑戦

① 基礎学力の確実な定着に取り組むとともに、生徒の習熟度に応じた高い学力の育成を図る。

② 多様な進路に対応しながらも安易に妥協させず高い志望に挑戦させる。
- 4 業務改善

① 慣例となっている行事・会議の見直し。

② 時間外在校等時間の縮小。

	具体的項目	令和 4 年度当初			評価結果(9 月)		
		現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 授業に集中	高校生活や授業におけるマナーを徹底する。	・98%の生徒が学校で定められたルールやマナーを守るよう心がけている。 （生徒がルールやマナーを守っていると評価している保護者の割合は97%、職員の割合は94%）	・ルールやマナーを守るよう心がけている生徒の割合が98%。 ・現状の校則やマナーを守った上で、生徒の主体的な活動により、校則の意義を考え、必要な見直しが行われる。	・自律的にルールやマナーを守ろうとする八頭高生の育成を目指し、挨拶の重要性やマナーの遵守について粘り強い指導を行い、様々な機会を捉えて保護者の理解を図るとともに、生徒の自主自律の取組を支援する。 ・学校評価アンケートの結果を分析し、教育活動の改善に生かす。 ・生徒保健委員会生活リズム調査を通年実施し、保護者との連携を図りながらルールづくりを進めるなどしてスマートフォンの長時間利用者の指導を継続する。	・自律的にルールを守ろうとする生徒が大半であるが、マナー（登下校中の歩きスマホ等）については今後に課題が残る。 ・校則の見直しについては、現状生徒会執行部内での意見集約に留まっている。 ・生徒保健委員による生活リズム調査を実施した。その結果について委員長・副委員長が考察をし、資料作成に留まっている。	C	・マナーについて考える時間が必要である。SHR 時や学年集会等でなぜマナーは身に付けるべきか考えさせたい。 ・校則の見直しは 10 月以降、生徒会執行部と連携して具体的に進めていく。 ・生徒保健委員による生活リズム調査は継続して実施する。委員長・副委員長を中心とした委員会活動で保健 LHR の企画や運営方法を練り、保健便り等でも啓発していく。
	全教科で公開授業や研究授業を実施するとともに、積極的に A L や I C T に係る研修に取り組み、生徒の主体的な学びを支援する。	・AL9 の視点をもとに生徒の活動や I C T の活用を積極的に取り入れて、延べ 1 5 名の教員が公開・研究授業を実施 ・昨年 11 月段階で 1 日あたりの学習時間は 1 年 104 分、2 年 102 分、3 年 146 分。1 年生で自宅学習時間が 2 時間以上は 31.5%、2 年生は 36.3%、3 年生で 3 時間以上は 39%である。4 月調査と比較して 23 年生は増加している。	・生徒の自宅学習時間が 1, 2 年生 120 分、3 年生 200 分 ・教員の ICT 活用力を向上させ授業に積極的に活用し生徒の理解向上の一助とする。 ・AL9 の視点を持って、全教科で公開授業を実施	・各教科で年 2 回（6・10 月）に研究授業を実施するとともに、事後の合評会では授業者・参観者の今後の授業改善につなげる ・各教科に ICT 係を設定し、情報科教諭、ICT アシスタントとともに ICT の有効活用について知識を深める ・各教科でスタディサプリの積極的活用を検討し、課題作成や補習の省力化を図るとともに、学習時間確保の一助とする ・定期的に自宅学習調査を実施し、担任等の個人面談を通して学習を支援する	・9 月末までに 4 教科 5 名の計 8 回の研究授業が実施された。 ・新型コロナ感染予防対策により自宅待機を余儀なくされた生徒に対してリモート授業を全学年で実施している。 ・4 月の調査結果では、自宅学習時間が 1 年 99（104）分、2 年 133(93)分、3 年 175(99)分であった。昨年度の同月調査と比較すると、23 年は上回っているものの、今年度目標に達しているのは 2 年のみであった。 ・スタサブ取組度は 3 年＞ 2 年＞ 1 年。 ・考查前のスタサブ課題配信が昨年より定着化。 ・ベネッセ社(Cassi)の AI による教材提供システムを試用し、有用性を検証中。	C	・より一層の ICT の有効活用を図るために校内職員研修を 12 月に実施する予定である。 ・10 月を研究授業集中月間として、未実施の教科に対して実施を呼びかける。 ・自宅学習時間については、例年、年度後半に向かって受験前の 3 年は増加するものの、12 年は 4 月調査よりも減少傾向になるため、LHR や面談等を通して粘り強い指導が必要である。 ・職員のスタサブ閲覧率が低下(昨年比 2 分の 1) ・Classi の試用成果をふまえ、継続、スタディサプリの併用の是非について検証し、次年度の方向性を定める。
	一人一台端末の効果的利用と、新学習指導要領、特に観点別評価の導入について円滑に対応する	・昨年、新学習指導要領による観点別評価、及び chromebook の有効活用に係る校内研修を実施し、理解を深めるとともに、具体的スキルの習得に務めた	・新学習指導要領に準拠した授業の実践と観点別評価が適切に行われている。	・授業改革研修会を実施し、新学習指導要領の理解を深めるとともに観点別評価のスキルの向上を図る	・観点別評価に関しては、暫定的な方法で実施しているものの、より良い評価方法の実施に向けて、情報収集と研修が必要である。 ・chromebook は担任、教科担当者としてさまざまな場面で活用。	D	・本年度中に校内研修会を実施するとともに、次年度に向けて八頭高方式の評価方法を策定する。 ・chromebook の活用がより双方向的になるようさらなる活用の在り方を研修する。

	具体的項目	令和4年度当初			評価結果(9月)		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
2 行事で団結・部活は熱中	本校独自の活動を通して八頭高生としてのアイデンティティーを育み、地域から信頼される学校作りを行う。	・八頭高愛し愛され運動を6月と11月の2回実施した。6月は、生徒265名が参加し、約35.3%の参加率、11月は、生徒241名が参加し、約32.2%の参加率となった。2回ともコロナ禍にも関わらず、多くの生徒が参加した。各回ともに目標の参加率30%以上を達成した。 ・思考力や実行力、地域理解の深まり等に関して、肯定的な意見「はい」「どちらかというとはい」は90%を超えている	・八頭高愛し愛され運動への参加者が各回とも全校生徒の30%以上 ・生徒会から積極的に意見を発信し、校則の見直しに参画する。 ・探究活動とおした思考力や実行力の向上に関して、肯定的な意見(「はい」と回答する生徒)の割合が60%以上 ・探究活動(2・3年生)とおした地域理解の深まりに関して肯定的な意見(「はい」と回答する生徒)の割合が70%以上	・生徒会執行部の全校生徒への呼びかけ方を工夫し、さらに参加者の増加を目指したい。 ・生徒会活動の活性化を支援し自主自律の取組を促す。 ・探究活動のプログラムの充実を図り、生徒が主体的に行動できる教材を開発する。 ・地域の理解を深めるため、キャリアパスポートの活用を充実させる。また、地域へのフィールドワークや活動内容の発信をとおして、地域とのつながりを強化させる。	・6月に実施した「第1回愛し愛され運動」には、346名の生徒が参加した。全校生徒728名の約45.6%が参加し、目標の30%を大きく上回った。 ・校則の見直しについては積極的な意見発信が出来ず、意見集約にとどまっている。 ・探究活動のプログラムの改良を継続的に行っている。2年翠陵探究の鳥取大学連携は計画通り実施。企業連携は延期のため、現在調整中。 ・第1回アンケート(7月)において、思考力等の向上意識の割合「はい」48.3(R3/37.6%)、また、地域理解の深まりの意識の割合「はい」54.5%(R3/42.0%)。 ・総合発表会を開催し、3年生は下級生に対してこれまでの成果を伝えることができた。 ・3年探究チームの数チームは八頭町内の小中学校を訪問し、成果発表や交流会を実施した。	B	・10月下旬に予定されている「第2回愛し愛され運動」は、1、2年生のみの参加となるが、新執行部の呼びかけにより、目標の30%を達成したい。 ・生徒職員の意見とともに、改訂される生徒指導提要求も参考にし、慎重に検討する。 ・探究活動を主体的な活動とするためのプログラム開発は今後も検討が必要。生徒の興味関心を引き出す資料づくりや指導者のスキルアップを図るための情報提供等が今後もお一層必要と考える。 ・1,2年生の後期は、情報収集・分析・発表等の活動が入り、また、2年翠陵探究では、大学や企業連携で外部の方との接触がある。このような取り組みを充実させることで、積極的な肯定的意見「はい」の割合を向上させたい。また、キャリアパスポートのより有効な活用についても引き続き検討したい。
	生徒の悩みに的確に対処し、心身の健全な発達を促すとともに、学習との両立を意識した計画的・効率的な部活動運営を行う。	・87%の生徒(保護者78%)は、八頭高は心身の悩みに関わる相談について適切に対処していると考えている。 ・昨年度全国大会出場者ホッケー(男子・女子)、陸上競技、卓球、柔道、書道、放送、バレーボール(全国選抜チーム代表)、歴史研究同好会、ビブリオバトル 合計67名	・生徒の心身の悩みに適切に対処していると回答する生徒の割合が85%、保護者の割合が80% ・学習と部活動の両立に向けて努力している生徒の割合が60% ・全国大会に出場した生徒数が80人	・日々の生徒観察や声かけ、hyper-QUの分析・検討会、個別面談、教育相談・特別支援委員会、教育相談係・保健係連絡会、人権教育LHR等を通して生徒の悩みを把握する。 ・教職員同士がコミュニケーションを密に取り合い、保護者との連携も図りながら生徒が安心して充実した学校生活を送れるよう指導・支援する。 ・各部が全国大会出場を目指し、生徒も指導者も日々の取り組みを継続し、目標80名を達成したい。	・昨年度同様、9月末時点までに「いじめアンケート」「Hyper-QU調査」をそれぞれ2回ずつ実施(QU:2年は1回)、悩みを抱えている生徒についての情報共有を行うとともに、クラス担任、学年団、教育相談係を中心に、該当生徒のケア、あるいは、見守り(観察)を行っている。 ・要支援生徒についての情報共有を定期的に行い、クラス担任、学年団、教育相談係に加えて、各教科担任も生徒の状況を把握し、ケア、あるいは、見守り(観察)を行っている。 ・9月末段階で全国大会に出場した生徒数は以下の27名。(昨年度同時期40名) ホッケー男子15名 卓球1名 柔道2名 放送9名	C	・「いじめアンケート」については、1月に第3回を設定しているので、これまで通り、アンケート結果の情報共有を行い、生徒支援に生かしていきたい。 ・要支援生徒に関する情報共有も今後継続して行うよう計画しているので、これらの機会も活用しながら生徒の支援を行っていきたい。 ・現段階で昨年度を13名下回っているが、何とか目標の80名をクリアしたい。年度後半の各部の健闘に期待する。
3 進路に挑戦	基礎学力の確実な定着に取り組むとともに、生徒の習熟度に応じた高い学力の育成を図る。	・進路を実現するために目標に向かって努力している生徒は、1年74%、2年85%、3年94%であった。(11月調査)	・進路実現に向けて努力している生徒の割合が1年生75%、2年生85%、3年生95%	・進路指導のための事業や、各類型、各分掌及び学年等の諸行事について、その意図・意義を生徒にしっかり理解させ実施することにより、視野を広げ、キャリアデザインにつなげていく。 ・キャリア教育全体計画に基づき、キャリア設計講演会、「大学生に聞く」講演会、長期休業中補習、勉強合宿、土曜自習・質問教室などの活動を通して進路選択と学力向上を図り、進路実現をより確かなものにしていく。	・キャリア設計講演会や難関大講演会、大学生にきく講演会など、生徒のキャリアデザインに向けての動機づけとすることができた。 ・夏季休業中には1年は補習を実施し107名が参加、2年は勉強合宿を実施し45名が参加した。3年生については勉強合宿を予定していたが実施できなかった。夏期補習には約100名が参加した。また、放課後補習においてはⅠ期41名、Ⅱ期102名、Ⅲ期90名が受講、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期は99名が受講を予定している。 ・土曜自習室については予定通り実施できているが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響でアシスタントティーチャーを十分に活用することができなかった。	C	・講演会の内容の充実や見直しが必要だと思われる。 ・生徒の学習の動機づけとなるよう、勉強会や補習の在り方について改善していく必要がある。 ・3年生においては放課後補習だけでなく、学習会小論文講座などの企画を実施し、主体的に学びさらに力をつけていける環境を整えていく必要がある。 ・ブロック大以上の大学を目指す生徒については2年次の後半には過去問の添削指導を受けるように促していく。 ・共通テストを含む大学入試において読解力や思考力・判断力が重視される傾向が強く、授業内容やカリキュラムにおける対応が必要だと思われる。
	多様な進路に対応しながらも安易に妥協させず高い志望に挑戦させる。	・国公立大学志願者(10月調査)は、1年121名(4月107名)、2年124名(1年4月131名)、3年107名(1年4月124名)であった。大学入学共通テスト受験者は131名(探究・総合コースの57.7%)であり、前年比1名増であった。国公立大学合格者数は58名、うち現役生は49名。前年比20名増であった。	・国公立大学の現役合格者数が50人 ・大学入学共通テストの受験者数が150人	・生徒との個別面談等をとおして、1、2年生は進路志望の確立とその実現に向けてなすべきことを強く意識させ、目標に向けて自律的に行動できる態度を育成するとともに、3年生は決定した希望進路の実現に努める。 ・大学・学部・学問研究の充実によって、将来のキャリアを見据えた上で何を学ぶべきかを考えさせ、具体的な進路目標に向けて努力する態度を育成する。	・進路志望調査(4月)による国公立大学志望者は1年118名(49%)、2年107名(45%)、3年108名(45%)であり、国公立大学の志望者が1年で増加している。一方、専門学校志望者は1年51名(23%)、2年39名(16%)、3年59名(25%)となっており、特に1年生において例年より多い。 ・進路志望の多様化が進んでいると思われる ・地元大学への志望者を増やす取り組みとして、公立鳥取環境大学との共同企画を実施した。 ・大学入学共通テスト出願者は132名(54.3%)であり、昨年より1名の増加であった。	C	・難関大を含む高い志望に向かって努力をする生徒を育成するためには国公立大志望者数の増加を図る必要がある。 → ・大学の模擬授業や説明会などの実施。 ・大学・学部・学問研究の一層の充実のために生徒自身が主体的に進路情報を収集・活用できる環境の充実 ・面接指導やLHRに資する有用な資料を紹介・提供。 ・各大学の入試結果や志望動向をもとに入試情報を分析・研究する。

4 業務改善	類型制完成年度となることから、慣例となっている行事、会議等を見直し、所要の改善を行うとともに、時間外在校等時間の縮減に取り組む。	- 令和3年度の時間外在校等時間が月45時間を超えた者は平均7.8人、年間360時間を超えた者は17人。 - 令和3年度の年次有給休暇取得状況は1人あたり平均13日1時間。 - 毎月の部活動実施計画は適正な時間で計画されている。 - 時間外在校等時間の多い教職員には、毎月の時間外在校等時間について個票を渡し注意を促した。	- 会議が短時間で効率よく行われている。 - 時間外在校等時間が月45時間を超える者が月平均5人(全職員の8%)以下、年360時間を超える者が10人(全職員の15%)以下。 - 年次有給休暇取得が1人平均14日。	- 学期単位で教育活動の見直しを行い可能な内容は年度途中からでも改善する。 - 掲示板等による情報共有を有効に活用。 - I C Tを活用し、業務効率化を推進 - 時間外在校等時間の多い教職員には、毎月の時間外在校等時間について個票を渡し、縮減に向けた意識喚起をする。 - 帰らーD A Yの設定と運用 - 夏季休業期間中に對外業務停止日を設定する。 - 全部活動が「鳥取県立八頭高等学校部活動に係る方針」を遵守する。 - 部活動実施計画、実施報告の確認	- 行事の精選、実施内容や方法について引き続き各分掌に検討を依頼。 - 掲示板や一斉メール連絡等を活用し口頭による伝達を削減。時間短縮と誤解誤認識の削減を図っているが、見落としによる不徹底、出遅れは懸念される。 - 保護者からの欠席遅刻の連絡をオンラインで行うシステムを作成。 - 對外業務停止日を夏季休業中に2日間設定 - 時間外業務が減少しない。在校等時間が月45時間を超える者が4月から9月まで毎月10名程度(実人数22名)。今年度は帰らーD A Y未設定。	D	- 月の時間外業務が多い職員には、具体的時間を示して注意を喚起している。継続して注意喚起する。 - 欠席遅刻連絡システムは運用1ヶ月を経過し、やや利用率が低下してきたので再度利用を促す。
-----------	--	---	--	---	--	---	---

評価基準 A：十分達成 [90%] B：概ね達成 [80%程度] C：変化の兆し [60%程度] D：まだ不十分 [40%程度] E：目標・方策の見直し [30%以下]